

メッセージアウトライン 創世記7:1～16「大洪水」

[1]「主はノアに言われた。『あなたとあなたの全家は、箱舟に入りなさい。この世代の中であって、あなたがわたしの前に正しいことがわかったからである」

ノアはすべて神が命じられたとおりにし、ついに箱舟を完成させた。彼のしていたことは世の人々からは理解されず、あざけりと嘲笑の的であったであろう。彼が箱舟を作った場所は材木が豊富に手に入る山の近くであり、海からは遠く、水害などからは程遠い場所であったであろう。しかし、彼は神に従い通し、神のみことばに従って生きた。それゆえ主は彼を主の前に正しい者、義と認められた。→ヘブル11:7 信仰には行いがともなうのである。

[2-3]「あなたは、すべてのきよい動物の中から雄と雌を七つがいつ、きよくない動物の中から雄と雌を一つがいつ、また空の鳥の中からも雄と雌を七つがいつ取りなさい。それらの種類が全地の面で生き残るためである」

「きよい動物」「きよくない動物」という区別は後代に記されるレビ記の律法の規定とは関係がない。まだ律法は定められていない。それゆえこれはノア自身の判断に任せられたのであろう。先に神は生きものをそれぞれ二匹(雄と雌)ずつ箱舟に連れてはいるようにとノアに命じられた(6:19~20)が、ここではそれに雄雌七つがいつのきよい動物、一つがいつのきよくない動物が加えられている(ここでは鳥については「きよい」「きよくない」ということばがないがそれはすでに動物で説明されているので、単純な繰り返しを防ぐためであろう)。このように動物や鳥たちが加えられたのは繁殖のためはもちろん、洪水後の生活のため家畜として飼えるものや、感謝のいけにえとして神にささげるためであったと思われる。→8:20

[4-5]「あと七日たつと、わたしは、地の上に四十日四十夜、雨を降らせ、わたしが造ったすべての生けるものを消し去る」ノアは、すべて主が命じられたとおりにした」

「あと七日たつと」…これはノアにとって最後の細かい準備のためであり、動物たちをそれぞれのすみかに落ち着かせ、食料を与えるためであり、また不信仰な世の人々に対して最後の警告を与えるための期間であったらう。しかし、その期間が過ぎるといよいよ神のさばきが始まる。それは四十日四十夜にわたる激しい豪雨から始まる天変地異である。

[6-9]「ノアは六百歳であったが、そのときに大洪水が起こり、大水は地の上にあった。ノアは息子たちや自分の妻、それに息子たちの妻とともに、大洪水の大水を避けるために箱舟に入った。きよい動物、きよくない動物、鳥、地面を這うすべてのものの中から、雄と雌がつがいになって箱舟の中のノアのところにやって来た。神がノアに命じられたとおりであった」

ノアが六百歳の時、この時洪水はまだ始まっていなかったがこの日を境に洪水前の世界は終わり、洪水に続く新しい世界が始まることが強調されているのであろう。動物たちが雄雌がつがいになって自ら箱舟の中のノアのところにやって来たということの背後には、神の摂理的な働きがあったと思われる。ノアたちが網や縄をもって彼らを捕らえに行ったのではない。そんなことをしていたら、いつまでたっても終わらないだろう。

[10-12]「七日たつと、大洪水の大水が地の上に生じた。ノアの生涯の六百年目の

第二の月の十七日、その日に、大いなる淵の源がことごとく裂け、天の水門が開かれた。大雨は四十日四十夜、地に降り続いた」

七日間という最後の恵みの時は終わり、神のさばきの時が来た。「大いなる淵の源がことごとく裂け」とは地球の地殻の中にあり、地表に湧き出た川や泉などによって地表を潤し、そこから流れ下る水で大洪水前の海を形成していた莫大な量の地下水が突如として一挙に地上に噴出してきたということであろう。この水は創世記1:2の原初の「大水」を神が創造の二日目に大空によって二つに分けられた(創世記1:7)「大空の下の水」のことであり、「天の水門が開かれた」とは「大空の上にある水」(地球を覆う巨大な水蒸気の層)が豪雨となって地に降り注いだということであり、そこには地殻変動や火山の噴火活動、地震などの様々な激変がともなったことであろう。火山の噴火活動によって吹き上げられた火山灰や他の粒子を含む噴煙は天に昇り、大空の上の水である水蒸気の層に入り込み、それが核となって液体となり大雨となって地に降り注いだことは十分考えられる。

[13-16]「ちょうどその日に、ノアは、息子たちのセム、ハム、ヤフェテ、またノアの妻と、息子たちの三人の妻とともに箱舟に入った。彼らとともに、種類ごとにあらゆる獣、種類ごとにあらゆる家畜、種類ごとにあらゆる地の上を這うものと、種類ごとにあらゆる飛ぶもの、鳥や翼のあるものすべてが箱舟に入った。こうして、いのちの息のあるすべての肉なるものが、二匹ずつノアのいる箱舟の中に入った。入ったものは、すべての肉なるものの雄と雌であった。それらは、神がノアに命じられたとおりに入った。それから、主は彼の後ろの戸を閉ざされた」

ここで言われている「種類ごとに」とは現代の生物学で使われている「種」の分類よりももっと広い意味で使われていると思われる。たとえば今日では犬や馬は多くの種類が知られているが、箱舟に入ったのは単に祖先となる「犬」の二匹(雄と雌)、「馬」の二匹(雄と雌)であった。さらに大部分の陸生生物は小さかったので箱舟に収容することは十分できたであろう。生物分類学者たちは、今日の世界に住む哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類は一万八千種よりも少ないと言っており、化石記録から知りうる絶滅した陸生生物を含めても倍の三万六千種と思われる。箱舟には各種類が二匹(雄と雌)ずつ入ったので合計で七万二千匹となる。箱舟には羊に換算して十二万五千頭以上収容することができたので、ノアが選んだきよい動物、きよくない動物、きよい鳥、きよくない鳥(2-3)を加えても十分なスペースを取ることができたであろう。収容された動物は象やキリンのような大きな動物もいたが、ねずみ、はと、とかげ、かえる等の小さな動物もたくさんいた。そして大きな動物さえも箱舟から出たときに長生きし、繁殖するために、小さく幼いものが選ばれていたであろう。

すべてのものが箱舟の中に入ったとき、驚くべきことが起こった。最後に入ったのはノアであったであろうが、「主は彼の後ろの戸を閉ざされた」のである。どのようにしてそれが閉ざされたのかは聖書には書かれていないが、箱舟の戸は人手によらず閉ざされ、封じられたのである。このことは箱舟に入った人々に彼らが神の守りと保護のもとにあるという最終的な保証を与えるものであった。

神のさばきによる大洪水は箱舟の外で荒れ狂っていたが、中にいる者たちは神の守りのうちにある。私たちもどのような困難や恐れの中にあってもノアのように神を信じ、そのみことばに従い、信仰を持って生きる者になりたい。→詩篇145:17~